

歴史的建造物の価値を再認識へ

第二区で土蔵調査

下諏訪町

信大生ら歩いて分布や状態把握

下諏訪町は7日、町内の歴史的建造物の価値を再認識する取り組みとして、同町第二区に数多く残されている土蔵の調査を行った。信州大学の学生や建築に興味のある人らが参加し、区内を歩きながら土蔵の分布やそれぞれの状態、特徴などを把握した。
(浜武司)



下諏訪町第二区内の土蔵を調査する参加者たち

同町は、江戸時代には甲州街道と中山道が交わる交通の要衝として栄え、明治から昭和初期にかけては製糸業で栄えた。多くの歴史的建造物が現存して現在のまちの景観を形成しているが、これまで歴史的建造物の具体的調査は行われていないという。

こうした中、昭和初期に建てられた西洋と近代和風建築が融合した旧矢崎商店が国の登録有形文化財に指定され、これを契機に町は町内の歴史的建造物の調査を計画。最初に町内に数多く残る土蔵にスポットを当てた調査を行うことにしたという。

第二区の調査には、旧矢崎商店の調査も行った信大工学部建築学科の梅干野成央准教授の研究室の学生や建築に興味のある一般の人ら24人が参加。旧矢崎商店で日本における蔵の歴史や変遷を学び、旧矢崎商店の土蔵を見学した後、区内の調査に出発した。参加者たちは3班に分かれ

て区内を巡り、昨年12月の事前戸数調査で把握していた約50戸のうち約30戸の土蔵を調査。屋根や壁の様式、こて絵など飾りの有無、全体的特徴を目視で確認して調査票に記入。中には土蔵を増築してアパートとして使われているユニークな建物も確認された。

梅干野准教授は「下諏訪には増築を重ねた不思議な建物が目立ち、土蔵は主屋に取り込まれるように建てられた『建てぐるみ』が多く、豪華ではないがしっかりした造りが特徴」と話す。参加した学生は「建築史を学んでいるが、土蔵に注目したことがな

かったのでとても興味深い」と話していた。

町は「時代を問わず下諏訪らしい建物の特徴を把握し、他にはない町の景観や文化、個性を記録、保存し、観光やまちづくりなどさまざまな分野に生かしていきたい」と話している。